

# HOME AWAY FROM HOME



## 「日常生活の些細な困りごとを頼める相手がいない」「会話相手がいない」

統計によると現代、高齢者の約30%が「会話相手がいない」

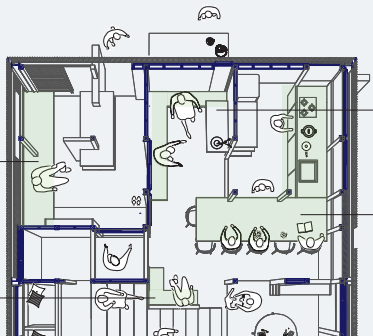
「人生の締めくくりである大切な数年間を、**誰とも話せず、誰にも頼れず孤独に終わる** ということは社会の大きな問題である。

独居高齢者の10人に1人が、**会話頻度1週間に1回以下**。電話でもいいから誰かと話したいという高齢者が日本には多く存在する。一生懸命生きてきても最期が孤立ならば、歳をとることへの希望が持てないとする。

身体は動かせるけれど、仕事を辞めたあと、自分の役割が見つからず、一日中家に引きこもり、何をして良いかわからないという考えの人も存在する。

人間関係の希薄さはお年寄りの方だけにとどまらず、**全世代で問題**になっている。1980年代頃までは、結婚家庭のほぼ2/3が専業主婦であり、母親は家事をして、子供の帰りを家で待っていた。しかし1980年代以降になると、**共働きの家庭は多くなり、核家族化**が進み、子供が学校帰り家に帰っても誰もお迎えに出来ない家庭が増加した。その変革期に、「学童」や「かざっこ」が増加し始め、同時期に子供の不登校問題が注目され始めた。

そしてこの頃、「心の居場所」といった学校に行きづらくなった子供が滞在する場所としての「居場所」という言葉が頻繁に使われるようになり、「子供の居場所論」という論文や文献が出版され始めた。つまり、親と一緒にいる時間、親からの愛情、家に帰った時に誰かに話したりすることの重要性というものがあることは必然的にはっきりしたことになる。



土間空間  
簡単に入りやすく、隣建物にある米屋の帰り、通りの前をたまたま通った人、バスの待ち時間など溜まりやすい

ダイニングテーブルを中心に座る居場所があるため、なんとなく話が入ったり入らなかつたりすることができると。

野菜販売のお会計を街の役割を求める人がボランティアとして行う。

役割を求める方がボランティアで規格外野菜を使った料理や、地元の野菜などを使った料理を提供。

みんなで喋りながら、栄養のあるものをきちんと食べる

働きて忙しく料理を作る時間がない家庭はここで子供を遊ばせ、食べて帰ることもできる。

## 不登校の人数推移

### 共働き家族の推移

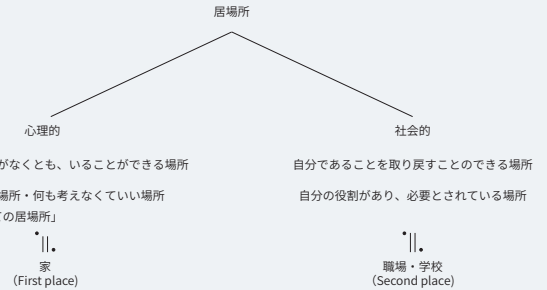
子供の不登校は休んだ日数に応じて不登校と認定されているが、時々休んでしまう子供、本当は休みたいたけれど親や先生からのプレッシャーで、無理やり学校に行き、嫌な思いをしている子供も多く存在する。**義務教育だからとい、義務的に小学校に行く必要はないと考える**。今まで、家に帰って親に相談していた話を、親でなくとも、身近に相談に乗ってくれる人、話を聞いてくれる人がいると、問題が深刻化する前に対処することがあるかもしれない。子供の不登校問題や自殺率の増加が大きく問題として取り上げられているが、**実際に不登校になる、自殺する一歩前段階**の人も多く存在する。

**核家族化**が進み身近な関係の人が離れ、近所付き合いも気薄化し相談したり、些細な事でも頼める相手を探すことが難しくなった。地域コミュニティは、元来多世代構造であり、子ども食堂や高齢者の施設などを区別して切り離して捉えることは地域コミュニティがもつ機能を分析する恐れがある。

## 居場所定義

居場所の意味(広辞苑)  
いるところ。いどころ

<守られた孤独・積極的孤独>  
人間には必要な居場所が2種類ある



<心理的居場所>

「そこに帰れば、なんとかなるような気がする場所」「安心して、惨めな気持ちにならずに孤独に浸り、秘密のようにそっと肯定感を召喚する場所」それは、わかりやすい「かたち」をもった「押し付けがましいフレンドリーさや虚ろな陽気さ、嘘くさい絆やテンプレートめいた家族イベント」といった過剰な物ではなくむしろ、「親しみを含んだ無関心さ」を持つ肯定感漂う場である。

家には家族がいるかもしれないが、家族が何もかも解決し、保証してくれるわけではない。家族は学校で起こった嫌なことや、友達を上手く作れないことなど全て、解決することは難しい。放置され、かえりみられないままに一人での状態に追いやられる**消極的孤独**ではなく、安心して「一人であること」を選び、味わえるような**積極的孤独**が一人ひとりの子供の安心感や楽天性、個性を伸ばし、広げていく。

<社会的居場所>

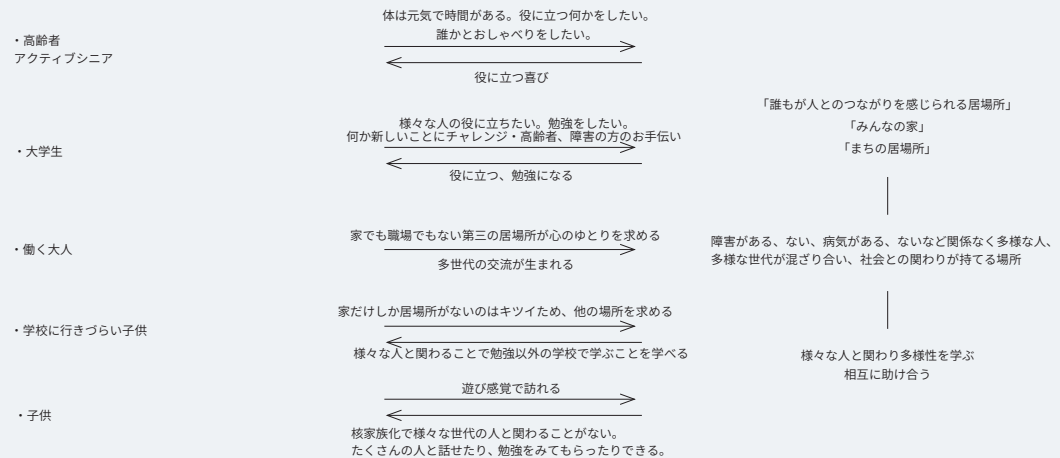
居場所を「自分が他人によって必要とされている場所であり、そこでは自分の資質や能力を社会的に発揮することができる」「自分であることを取り戻すことのできる」場所と定義している

この考えは高齢者やフリースクールに通う子供、生きている価値が分からないと考える人にとって大事である。

## 多世代構造

地域コミュニティは、**元来多世代構造**であり、子ども食堂や高齢者の施設などを区別して切り離して捉えることは地域コミュニティがもつ機能を分析する恐れがある。高齢者にしかできないこと、子供にしかできないこと大人しかできないこと、その世代、年齢の人、その人にしかできないことはあると考える。それぞれの特徴を活かして与える・与えもらう関係を多世代間で作る必要がある。

<まちの居場所・みんなの家への関わり方>



・高齢者  
アクティブシニア

体は元気で時間がある。役に立つ何かをしたい。  
誰かとおしゃべりをしたい。  
役に立つ喜び

・大学生

様々な人の役に立ちたい。勉強をしたい。  
何か新しいことにチャレンジ・高齢者、障害の方のお手伝い  
役に立つ、勉強になる

「誰もが人とのつながりを感じられる居場所」  
「みんなの家」  
「まちの居場所」

・働く大人

家でも職場でもない第三の居場所が心のゆとりを求める  
多世代の交流が生まれる

障害がある、ない、病気が、ないなど関係なく多様な、多様な世代が混ざり合い、社会との関わりが持てる場所

・学校に行きづらい子供

家だけしか居場所がないのはキツイため、他の場所を求める  
様々な人と関わることで勉強以外の学校で学ぶことを学べる

様々な人と関わり多様性を学ぶ  
相互に助け合う

・子供

遊び感覚で訪れる  
核家族化で様々な世代の人と関わる機会がない。  
たくさんの人と話せたり、勉強をみてもらったりできる。

共働き家族の推移



みんなの家

大きな机と椅子があり、みんなが対面でも向かい合話することができる。家にも一人でもつまらないから毎日みんなの家に訪れ、同じ場所に座るおばあちゃんやフリースクールに通う子供、パソコン作業をする大人など、この大きな机で様々な活動、人が混じり合っている居場所。



シェアキッチン

月に複数回おばあちゃん食堂や高校生食堂など地域のおばあちゃんや高校生が地域の人の手を借りながら作る地域食堂を開催する。料理をみんなで作り、お手頃価格で食事を提供、様々な人が集まりみんなでご飯を食べる。料理でつながるコミュニティの場所。



規定外野菜販売・駄菓子販売

近くの田畑で作られた農作物のうち、スーパーなどに卸売できない規格外野菜を販売・配布している。また子供が多く訪れるため、昔ながらの駄菓子も販売している



フリースクール・勉強場所

フリースクールにはソファとテレビがある 4 畳程度の部屋となっており、週に数回勉強を教える講師が訪れる。勉強場所ではWi-Fi、コンセント完備しており小学生から大学生まで様々な学生が訪れ勉強をする場所として地域に開放している。



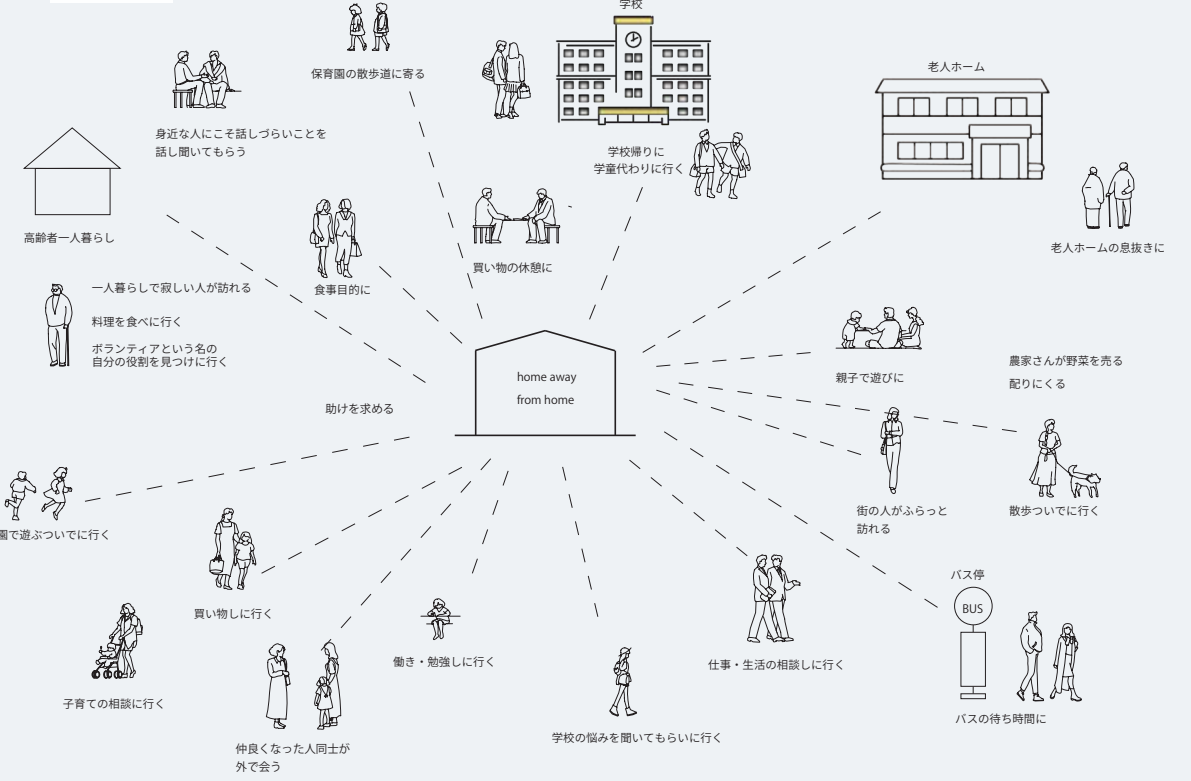
選定敷地は栃木県那須塩原市下永田2丁目

栃木県那須塩原市に位置し、那須塩原の中でも南東に位置する。西那須野駅から徒歩8分程度の場所にあり、近くには学校が複数あり、高齢化しているものの、子供世帯もいる住宅街に囲まれている。

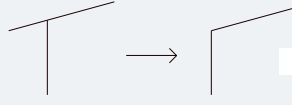
地の隣には大山参道のモミジ並木があり、敷地から車で20分すると田んぼや畑が多く、農作物が豊富である地域である。



人の流れ  
・相互関係







ツルツル建物の街並み

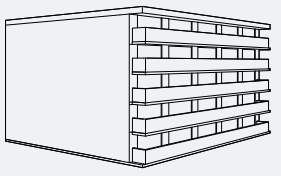
軒の下で行き場に困っていた人たちは今どこにいるのか

「軒を貸して母屋をとられる」と言うことわざがあるが、昔は軒を貸して、母屋に人を入れる習慣があったからそれが成立していた。ところが、1960年代、70年代の都市計画で、都心などの狭小地は「居住空間をギリギリまで確保するため」「建蔽率を小さくするため」などの理由により、軒をやめてツルツルの建物が増加した。

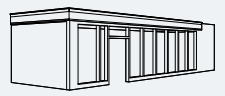
コンビニでも軒がなくなってきている。コンビニの軒下には行き場のない子供がたむろする・やんちゃな子供がたむろしていた。どうして、そのような子供が軒下に、たむろしないといけないのか、理由を考えてあげないといけない。その子供たちは軒がなくなった今、どこかの別の場でたむろしているのか。

加えて、公園からも時代とともに東屋がなくなっている。東屋で寝ている人がいる、というのは、東屋にいないといけない社会構造になっているからであり、そのような場所を一方的に無くしていくと、町も、社会もどんどん貧しくなっていく。軒に、困った人がやって来て、その中でも外でもない空間が行き場のない人の場所となっていた。また、軒がなくなることによって、雨宿りする場所もなくなり駆け込める場所が少なくなった。

軒の建築



ベランダと同じ長さの軒が出るマンション



軒のないコンビニ



なくなってきた東屋

一般的に言われる多世代交流場所  
延長して生まれる空間の余白



台の延長



床の延長



内部空間を外に延長



屋根の延長



塀の延長



床の延長



玄関の延長



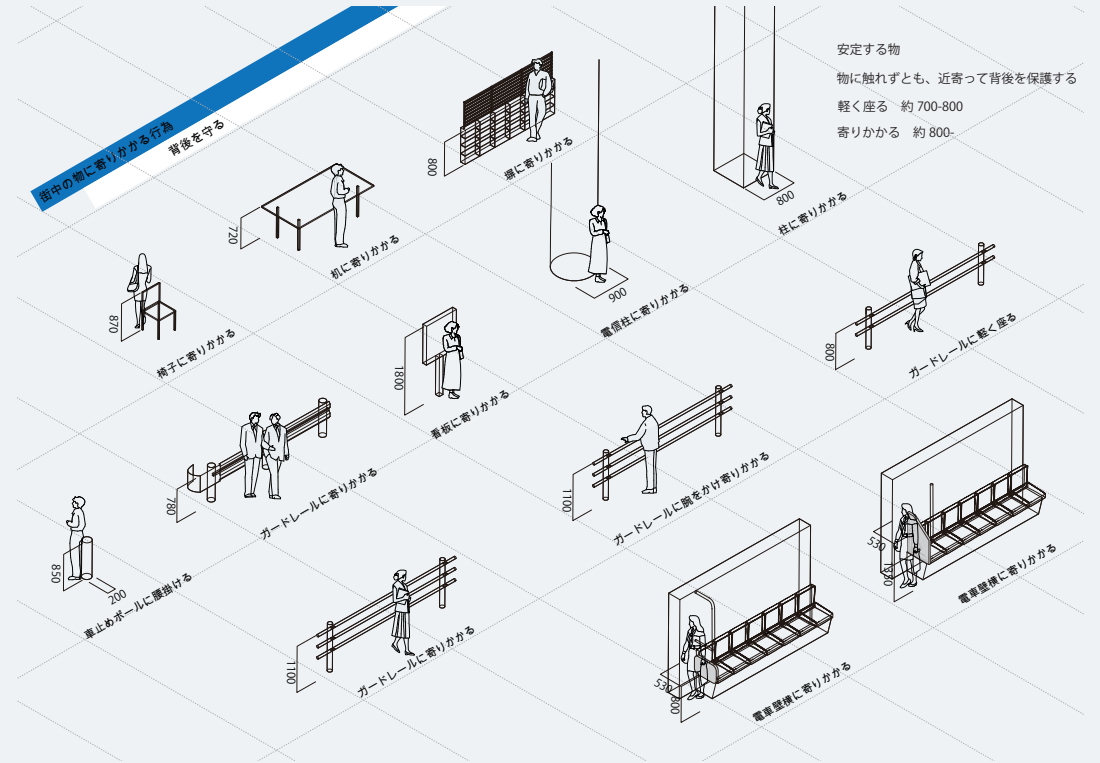
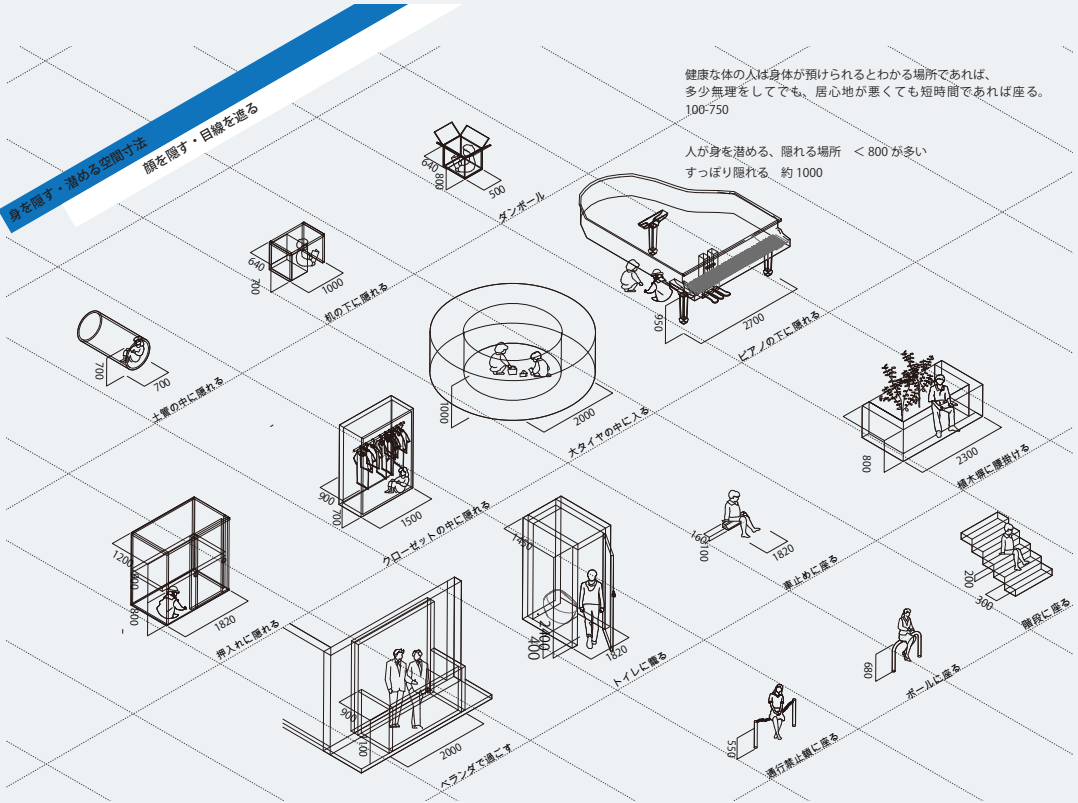
壁の延長



家の中の機能を延長

延長することのヒント

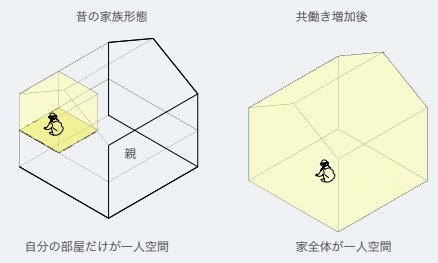
余分と思われるスペースにこそ居場所が生まれる



### 家での隠れる場所

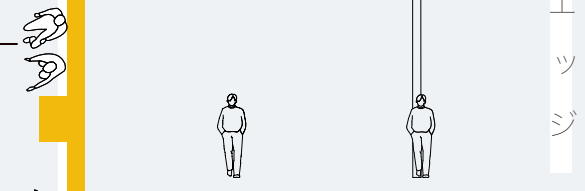
共働きが多くなり、家に帰っても一人、もしくは家にも個室がそれぞれあるので、子供達は一人になりたい、隠れたいと思えば個室に逃げ込むことができる。

ここでの「隠れる場所」は、驚がかりながらもちょっと未だ身を隠している、というようなもの。子供達は「隠れている」ということを、実は他の大人や子供にわかって欲しい。身のまわりで見つけた子供の居場所も、四方向完全に閉じられた個室ではなくて、一方空いていたり、上から覗けたりする。そんな隠れているところを知ってもらふ場所作りを行う。



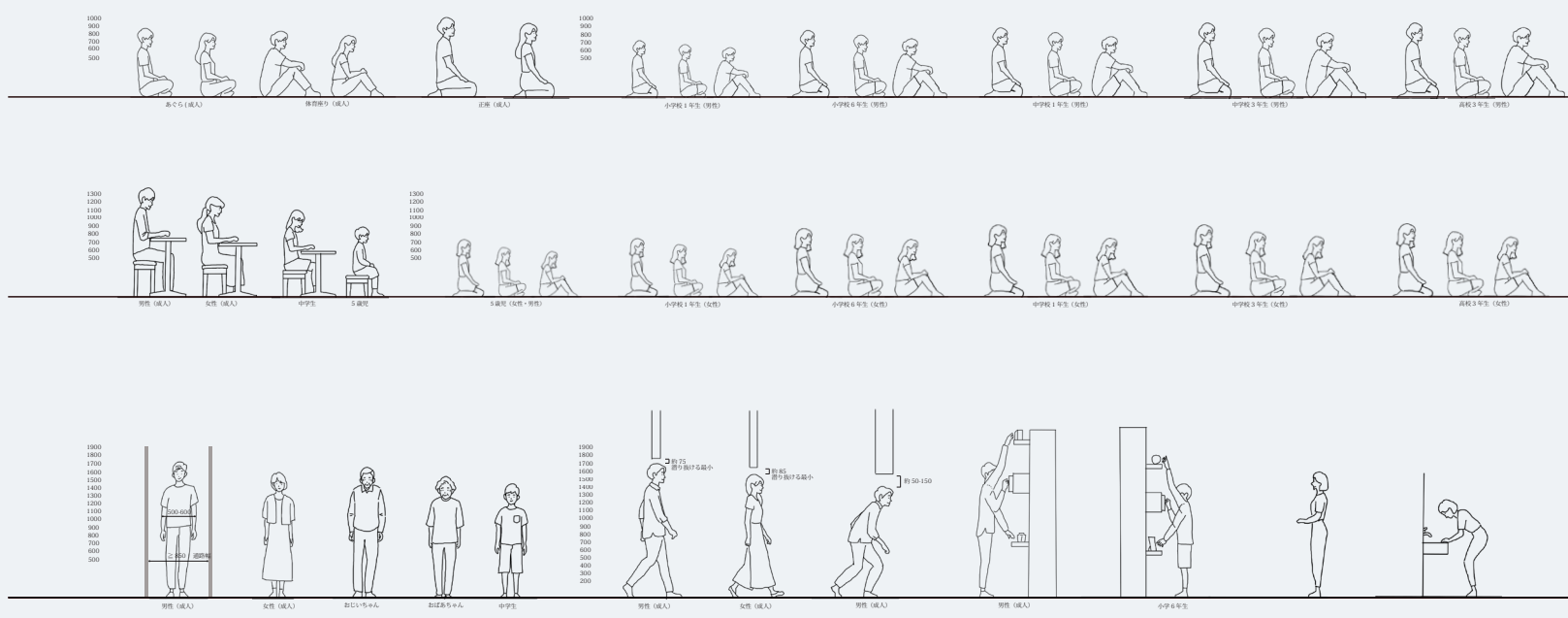
### 街中で立ち止まる時

無意識にどこを選んでいるのか

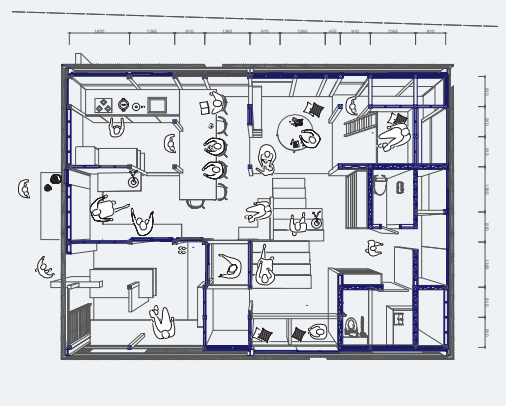
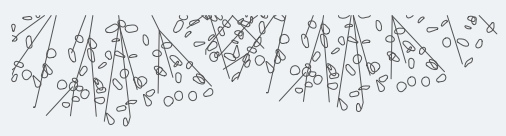


しばらく足を止める時、人々は決まって空間の縁に沿った場所を探す。空間の縁に身を置くと、私たちは歩行者の流れを妨げることなく、自立たず静かにそっとその場にどまることができる。エッジにいと周囲の物事を良く観察することができ、背後が保護されていて不意をつかれないで済む。

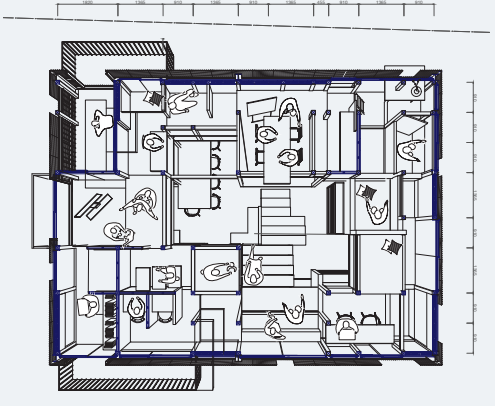
柱や壁が柱通常より太く厚い場所、延長しているいる箇所を作り、エッジを作り出す。



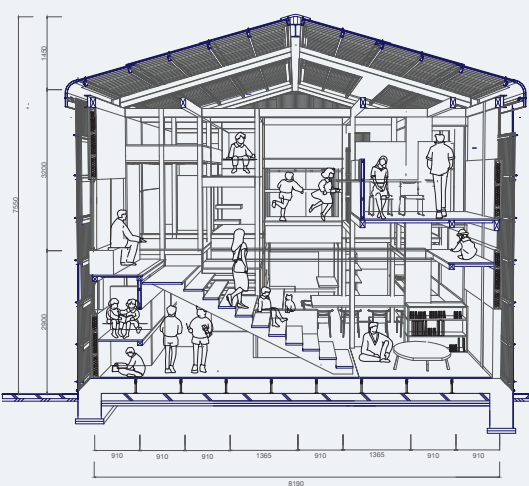
<p>&lt;あくら&gt; 小学1年生 頭が隠れる &lt; 700 目線が合わない &lt; 600</p> <p>小学6年生・中学1年生 頭が隠れる &lt; 800 目線が合わない &lt; 700</p>	<p>&lt;正座&gt; 5歳児 中学3年生・高校6年生・中学1年生 頭が隠れる &lt; 900 目線が合わない &lt; 800</p> <p>小学1年生 中学3年生・高校3年生・成人 頭が隠れる &lt; 800 頭が隠れる &lt; 1000 目線が合わない &lt; 700 目線が合わない &lt; 900</p>	<p>&lt;体育座り&gt; 5歳児 中学生・成人(女性) 頭が隠れる &lt; 600 頭が隠れる &lt; 800 目線が合わない &lt; 500 目線が合わない &lt; 700</p> <p>小学1年生 高校生・成人(男性) 頭が隠れる &lt; 700 頭が隠れる &lt; 900 目線が合わない &lt; 600 目線が合わない &lt; 800</p>
---	--	--



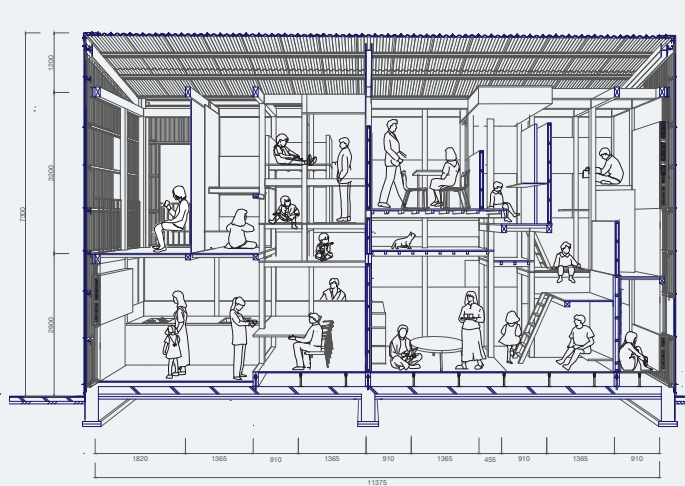
2F 平面図



2F 平面図



断面図



断面図